

# 外陣講義文書

「第1講義文書」  
(0 = 0 プロベイショナー)

## 第9章

### 召喚魔術

- 1 何故魔術を学ぶか
  - 2 魔術師に要求される徳目
  - 3 見えないものを見る
  - 4 靈的存在のヒエラルキア
  - 5 召喚と喚起の差異
  - 6 天使存在
  - 7 召喚の技法
  - 8 七の封印
  - 9 門の召喚
- 課題瞑想：火の文字

**THE OFFICIAL ORGAN  
OF  
I::O::S::**

**PUBLICATION IN CLASSES C~D  
IMPRIMATUR: M FRATER I::O::S::**

**First published 1986 by I::O::S:: private edition (1st).**

**Second published 1998 by Sekibunsha (4th).**

**Third published in 2005 online versions by I::O::S:: (ver.5).**

**This Edition Fourth, Revised and Expanded in 2013 (ver.6).**

**All rights reserved. © Tzutom Akibba 1986, 1998, 2005 and 2013**

# 知識講座

## 1 何故魔術を学ぶか

学習も佳境に入ったところで、根幹に立ち戻り、魔術を学ぶ動機についてあなたに問い質す時期に来ている。これは自分の真実の意志を確認する作業であり、ごまかしや自己欺瞞は、そのまま事後の学習を歪めてしまうので、虚飾を払い容赦なく自己の深みをさらってみねばならない。

しかし、ことは簡単にいくまい。何故、魔術に興味をもったかは簡単に思い出せるかもしれない。本屋で派手な表紙の解説書を目にしたとき、占いを始めた友人の何気ない一言、西欧文学を学ぶときの必要性からなど、様々な動機があるだろう。しかし、これらはきっかけに過ぎない。あなたが単なる興味本位の学習から、真剣な人生の目標として魔術の学習を位置づけたのはいつからだろうか。このプロベিশヨナーの学習の過程において、その認識に辿りついたのであれば、われわれは誇らしく思うだろう。もし、まだ、その認識に至っていなければ、この学習があなたにとってどんな意味をもつのか再考してもらいたい。

筆者の師弟系列では3代前の師父にあたる故W・E・バトラーは、最初にメイソン系列の結社に入団したときの様子を次のように描写している。

「美しい法衣をまとい、目隠しをされ、わたしはロッジの扉の前の暗闇に待たされた。

ロッジのなかから声が響く。

『扉の前に立つは誰か』

わたしは答えた。

『汝らの密儀に参入し、その指導を得ることを欲する者なり』

声が問う。

『何がために密儀を学ばんと欲せるか』

わたしは、唯一の答え、秘教科学の唯一の鍵となる言葉を答えた。

『奉仕せんがために、知らんとするなり』 … 」<sup>(1)</sup>

このバトラー師の最後の言葉は有名である。かれは繰り返し、この言葉を弟子たちに教え諭した。われわれも肝に命じておかねばならない。

しかし、この質問には続きがある。

「誰に、または何に奉仕するのか」

あなたはステレオタイプの返事を口にする前に、慎重に考えねばならない。ステレオタイプとは、次のような回答だ。師匠に奉仕する。同僚に奉仕する。団に奉仕する。世界に奉仕する。神に奉仕する。伝々。

あなたが魔術の学習をしようとするとき、あなたを動かしているのは、幾つか内在するあなた的人格群の表層部分の表皮に過ぎない。自分の人格はひとつだけだと主張したいかもしれないが、普通の人間は多数の「わたし」を抱えている。他人から見て、あなたは一人の人格に見えるのは、不機嫌な「あなた」にも、陽気で御調子者の「あなた」にも誰々何某という名札が下がっているからに過ぎない。あなたの友人は、あなたの肉体というラベルを読んで、あなたを見分けているのだ。しかし、人間の意志が幾つかの層に別れるように、人間の人格も複数存在する。秘教の用語では、これらの皮相的な人格を「翔ぶもの」と言う。それは深く暗い自我の海の上を飛翔する表向きの顔であり、社会に向けたペルソナである。しかし、魔術の力は自我の深みに発し、この仮面のひとつを通して作用する。いくら魔術師でも余程深いレベルの魔術を行わないと、仮面を破壊して真の自我が現れることはない。それはひとつの約束事なのである。長い訓練を積み、自己の靈魂の多重性を理解して初めて、様々な下位の自分を支配し、ひとつの雄大で深遠な人格に統合することができる。

---

(1) W.E.Butler, *Practical Magic and the Western Mystery Tradition*, Wellingborough : The Aquarian Press, 1986, p.19.

しかし、同時に次のことも知っておかねばならない。真の意味で、個々の人間が「離れ小島」になることもないのだ。誰もが、自我の深いレベルでは、その家族、民族、あるいは種族全体と結びついている。そのため人間の行動や思索は、人類の集合精神の影響を常に受けている。それを時代精神（時代霊）と呼ぶこともあれば、原罪と呼ぶこともできるのだ。

これらを考え併せて、魔術の奉仕対象としてあなた自身が浮かびあがってくる。もちろん、それはあなたの低劣な欲望の満足や、コンプレックスの解消のために行うものではない。魔術的な解釈による「自己に奉仕すること」の意味を考えねばならない。当然のことだが、自己とは「真実のあなた」であり、銭勘定をし、他人と言ひ争ひ、あくせくと瑣末的な仕事に従事する複数の仮面を被った「あなたたち」ではない。

そして、自己の真の意志を見いだすことができれば、それが種族全体の真の意志、すなわち「永遠の声」を構成する音階であることも疑いはない。

この学習を通じて、あなたの心は「永遠」に対して開かれていく。

従って、秘教の学問を学ぶ者たちは、自らの霊・魂・体を継続的に生ける犠牲として捧げるべく次の祈りを唱えるのだ。

“ *Tibi sunt Malkuth et Geburah et Chesed per aeonas.* ”

「汝が上に御国と、力と、栄えあれ、永遠に」<sup>(2)</sup>

アイオナスとは、「永遠、時代」という意味のギリシャ語  $\alpha\iota\omega\nu\omicron\sigma$  のラテン語読みである。真の意志をもち生きる時代、すなわちアレイスター・クロウリーの宣言した「ホルスのアイオン」のアイオン ( $\alpha\iota\omega\nu$ ) と同義である。

われわれは自分自身の時代を切り開いていかねばならない。そのためにも、完全な自己に奉仕することは、現在のアイオン、すなわち「永遠」に奉仕することにほかならない。<sup>(3)</sup>

「誰に、または何に奉仕するか」という質問へのひとつの答えとして、「永遠に奉仕するものなり」という答えが投げかけられた。あなたは、いかなる答えを用意しているだろうか。

---

(2) Eliphas Levi, *Dogme et Rituel de la Haute Magie*, Paris : Bussiere, 1977, p.223.

(3) W. E. Butler, *Magic and the Qabalah*, Wellingborough : The Aquarian Press, 1978, p.44.

## 2 魔術師に要求される徳目

当面、魔術師に必要なと思われる徳目には、次の三つがある。

- ◎ 眼識 : 真實を見分ける能力
- ◎ ユーモア : 厳しさと哀愁のエッセンス
- ◎ 献身 : 内なる供犠

### (1) 眼 識

何故、魔術師に眼識が必要なのかを語る前に、あなた自身が以前感じていたに違いない疑問について考察しよう。それは、「ひとりで魔術を学ぶ者は、どうやって儀式魔術を行えばよいのか」ということである。

一般に魔術学習には、ふたつの大きな側面がある。ひとつ目は、個人としての訓練や修行であり、ふたつ目はその訓練を積んだ者たちが他人と組んで集団で儀式などを行う方法である。当然のことだが、訓練の初期には個人作業に重点がおかれ、後に段階的に集団作業に重点が移って行く。

これは良く言われることだが、個人的に瞑想や魔術作業の修行を積んでいた者に準備ができたとき、接触すべき団体、ロッジ、オーダーなどが自然と現れる。伝承に曰く－「弟子に準備ができたとき師は現れる」－しかし、その師が本物であるかどうかまで、伝承は唄っていない。あなたは、師匠の真實を自分の目で見分けなければならない。名門と呼ばれる魔術の学院は、師匠の資格について歴史的証明を提供していると思うかもしれない。しかし、創設者が有名な魔術師であり、教育者として卓抜していたとしても、現在の後継者がその遺髪を正確に受け継いでいるとは限らない。あなたは眼力を養い偽魔術師、邪師の類を判断しなければならないのだ。

また、逆説的な物言いになるが、結社等への参加は、望ましくはあるが絶対に必要な要件ではない。中世のヘルメス学の師匠は慎重に内弟子を選び、ただひとりの弟子に口伝を残したのである。それを考え合わせても、団体に所属しなくても光明を得ることは可能である。また、結社に参加したが故に修行の妨げを得ることもあるのだ。多くの保守的な結社は「位階」システムを有している。それは第2章で見たように古式豊かなものもあれば、単に初伝（Ⅰ°）、中伝（Ⅱ°）、奥伝（Ⅲ°）に分けるだけかもしれない。しかし、これらの位階や階級は、ときとして修行者の自己弁護や、傲慢な仕打ちの隠れ蓑として用いられる。ほとんどの結社において、位階とその表象する「霊的意識水準」は一致していない。さもなくば、すべてのアダプタス・マイナーは、「キリスト意識」（大霊（The over-soul）<sup>(4)</sup>）を有しているはずではないか。すなわち位階は、学習の目安とするマイル・ストーンであり、その位階で学ぶべき意識の到達目標なのだ。しばしば、あまりにも高い目標を掲げているために、その目標に達しないまま位階を卒業することになる。従って、修行者は自分の位階にも瞞着されてはならない。位階の威光を帯びたあなたがいる訳ではなく、その位階相応の力を身につけようと努力しているあなたがあるのだ。《黄金の夜明け》団でさえ、これを忘れたばかりに、サロンの雰囲気の中、無意味な高位階を胸にピンでとめた自称アダプトが蔓延した。

健全な霊的な判断力と批判力こそが眼識である。あなたはそれを身につけるよう努力しなくてはならない。

---

(4) ラルフ・ウォルドー・エマソン「神（The Over-Soul）」『エマソン選集2』日本教文社、1961年、201-229頁。

## (2) ユーモア

魔術とは難しいもの、恐ろしいものというイメージが先行している。そして、魔術師とくると真面目なことを響め面しく語る老人という先入観があるだろう。しかし、がちがちのピューリタンの生活態度では魔術の真のリズムを掴むことはできない。真剣になることは必要だが、同時に遊びの精神も大切なのだ。インドでは、瞑想の行は、すなわち「遊び」(リーラ)である。

ここで再びバトラー老の故事に戻るが、かれが言い残した台詞に面白いものがある。

「もし、君がユーモア感覚を持ち合わせていないなら、オカルティストになるべきではない。君が霊的攻撃を受けたとき、笑いほど頼りになるものはない、チョウジやニンニクよりもね。まず、喜劇映画でも見に行きなさい。君を陥れるために膨大な時間を費やし、技術を駆使している誰かが、お笑いものを見て腹を抱えている君を見つけたら憤激するだろうしね」

ここでユーモアと言う代物について、考察しなければならない。日本には、「他人の不幸は鴨の味」という諺があるが、確かに笑いの1要素として隠れた残虐嗜好があるのは否定できない。苦しむ者を見つめて優越感に浸るサディスティックな笑いである。しかし、その種の笑いはフランスの哲学者ポール・ヴァレリーの言う「野卑な痙攣」のレベルであって、自らの不遇・苦境を含めて笑い飛ばせる機知に富んだ諧謔精神とは疎遠のものだ。われわれが求めるのは後者である。

ユーモアの代表選手として、フランソワ・ラブレーの一連の作品『ガルガンチュワ物語』や『パンタグリユエル物語』(岩波文庫)などを見ると良いだろう。自分自身をも客観化して笑い飛ばせる余裕がなければ、ユーモアは保持し得ない。

## (3) 献身

インドのヨガ行のひとつにバクティ・ヨガというものがある。このバクティとは、「献身」という意味であり、神に対する完全な帰依と無私の心による奉仕を説いている。数あるヨガの流儀のひとつが、献身を名前にすることでも分かるように、東洋的な秘教の知恵は、自己を無にして神に支えることを重視した。西欧の秘教的学問体系においても、基本的な事情は同じである。

第1項で検討したように、古い秘教の伝統では、参入者に問いかけを行う。「何のために学ぶのか」という質問へのある答えは「奉仕するため」であった。

秘教の学習には、本人が成熟し、学ぶ意志をもち、準備ができていなければならない。あなたの準備はできているだろうか、奉仕するために学ぶ準備が。

奉仕の究極の形態が献身である。これは秘教の訓練だけに留まる話ではない。無私の奉仕は神への、或いは同朋への献身である。寝食を忘れて弱者の面倒を見るソーシャルワーカー、生命をも顧みない消防士の勇敢な行為、無医村に出掛けて行く若い医師など、様々な形の献身がある。しかし、秘教の学習における献身も、それらに比較して見劣りする訳ではない。秘教の学徒は、自らの人生、生命、そして靈魂そのものを供犠として「永遠」に捧げる必要がある。何も英雄になれと言っている訳ではない。むしろ、その生涯は静かで波乱のないものに見えるだろう。しかし、真の秘教の探求者は、惜しみなく自分の全てを、永遠の祭壇の犠牲として奉納する覚悟をもち、実際にそうするのである。

別な言葉で言えば、魔術の修行者は自らを神聖なる霊を受ける盃にする覚悟が求められる。器は空となり、「上なる水」が注ぎ込まれる。

「汝が魂の盃に、汝が霊のワインを注ぎ、それによりて神聖なる醗酌を味わうべし」

### 3 見えないものを見る

人間の構造を表すのに霊・魂・体という言葉が良く使われる。この相互に浸透し合う三重の領域をもつ知的存在が人間であるという。さらに広義に解釈すれば、動物、植物、果ては鉱物にまでこの三重の領域は存在し、金属の知性や、植物の感情を論じることでもできると言われている。しかし、あまりに異質な生命についてはここでは論じない。

およそ物質存在である限り、その行動の基盤となる肉体をもっている。それでは、良く言われる霊的存在はどうだろうか。肉体を持たないからこそ霊的存在だと断言できるなら簡単だが、魔術の伝承では、さらに複雑な準・霊にあたる霊的存在についても語られている。

伝承に曰く、「肉」には2種類あると言う。アダムから来た肉と、非アダムから来た肉である。アダムから来た肉は、重く稠密であり、石の壁を擦り抜けたりはできない。一方、非アダムの肉は精妙で、希薄であり、空間の制限に捕らわれない。アダムの裔たる人間にとっては極めて異質に思える非アダムの肉体をもつ知性たちは、我々と同様に話し、飲み、食べ、歩き、一族をなし、子供を作る。

イアンブリコス曰く、「かれらは霊的に移動する故に、人間ではない。しかし、血肉をもち、生活を営むが故に霊でもない。かれらは特別の被造物である。人間は靈魂をもつが、霊は持たない。この被造物は、かつて靈魂をもっていたが、いまは持たない。霊に似通っているが、霊は不死であるが、被造物は死ぬ。(そして、生まれ変わらない)かれらは人間とは別の方法で子をなす。」

これは妖精存在、四大のエレメンタルに関する記述である。伝承では、限りなく長い寿命を持つが不死ではなく、靈魂を持たないが故に転生もできない哀れで美しい(恐ろしい)存在として、描写されている。その真偽を追及するのは、次章に譲るとして、これらと肉体を持たない霊を含めた霊的存在すべての、一般的な現れ方を以下で検討しよう。



魔術師は、通常とは異なる方法で世界を見る。

世界は生命で満ち溢れている。砂漠の殺伐とした風景のなかにも微生物を含む様々な小動物が動き回り、植物の種は雨季の恵みを待って眠っているのだ。そして、これら「重」い物質生命のほかにも、精妙希薄な元素からなるエレメンタル領域の生命が住みついている。さらに肉体のない霊たちは、物質に投影され、その陰に重なって存在する。

われわれは日常の生活のなかで、これら霊的存在の訪ないを幾度も迎えているが、気づかないだけである。霊的視力を獲得していない修行者は、かれらの「静かな訪ない」を察知することはできない。しかし、随所に印を残して行く場合がある。物理的印象として、痕跡を残す「騒々しい訪ない」には、二種類のパターンがある。純粋な霊の場合は、人間の超感覚的知覚が不可視の霊に共鳴し、表現しようのないその印象を、日常的な五官の感覚に翻訳しようとするため生じる。人間は肉体の目で霊を見ることはできないが、霊の出現時にあたかも霧のような流れが見えるの

はそういうことだ。一方、エレメンタルの場合は組成は異なるが物理的に干渉できる肉体をもっているのだから、直接見えたり、髪を引っ張られたりする。これには別の解釈もあるが、ここでは言及しない。



さて、我々は霊的存在を、そのままの姿で見たり、色彩、イメージ、動物、影、もしくは一種の象徴的できごととして知覚する機会がある。

霊的知覚は視覚に翻訳されるだけではない。霊的聴覚とされる現象には、つぶやき、泡立つ音、ベル、叩音、ラップ音、屋鳴りなどがある。群衆のなかで意味のある言葉の断片を聞くのも、あなたの脳が霊的印象を翻訳しようとした試みかもしれない。

何も理由がなく、異様な匂いを嗅ぐときも同様だ。悪魔の出現時には、硫黄の匂いがするという。それは悪魔を知覚しようとするものが、地獄の硫黄火をイメージし、その印象に引きずられるためである。舌の上に酸っぱい味を覚えることもある。

接触については報告例が少ない。しかし、何もない空間に蜘蛛の巣を搦めたような感触を覚えることはないだろうか。髪の毛が自然と絡まるのを妖精の結び目と言う。いたずら好きなエレメンタルが、髪を引いたり、子供を指でつついたりするのは良くあることだ（少なくともそう感じることは）。

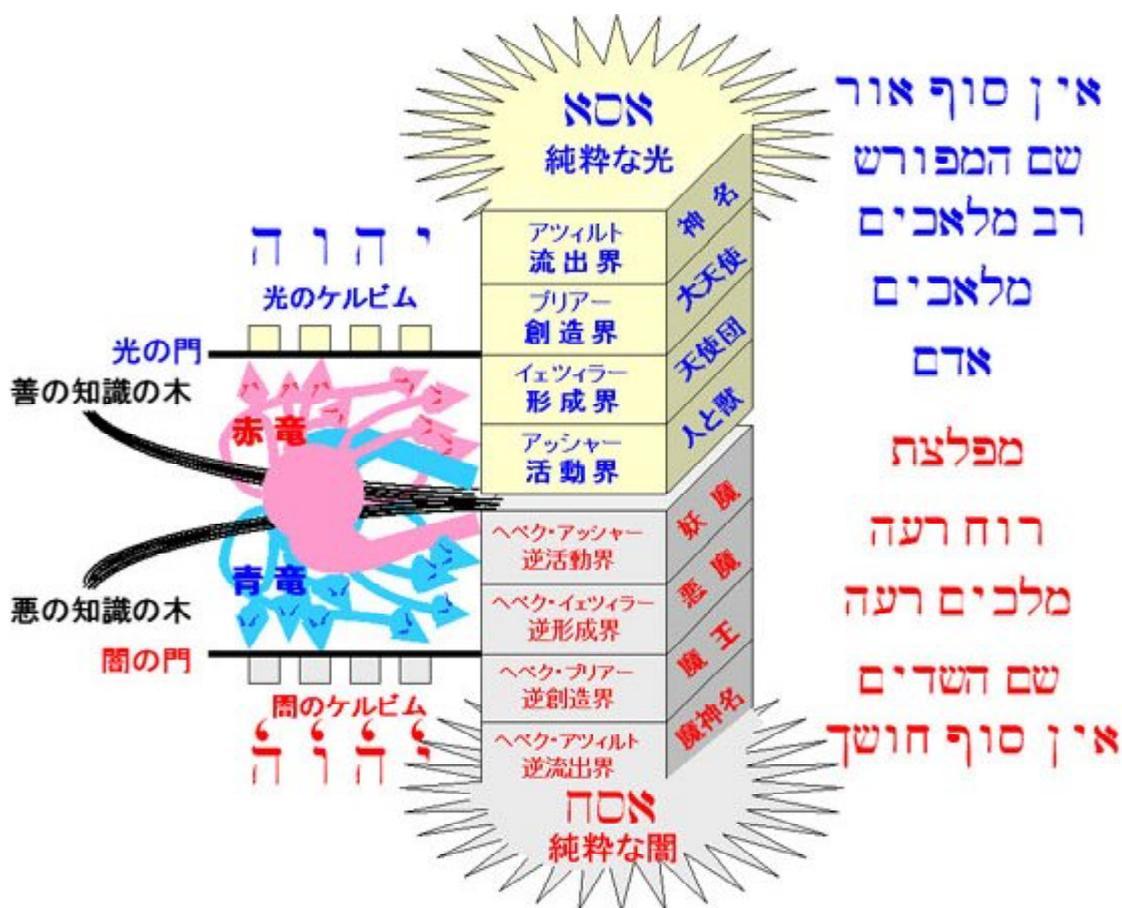
さらに極端な場合は、体感温度が変化する場合がある。暖かくなったり、寒くなったりする。天使の降臨のとき全身に湯を浴びたような熱感を覚えることがある。

## 4 霊的存在のヒエラルキア

我々の光の世界と、魔族らの影の世界は、物質界を接点として上下逆さまに生えた1対の木の形をしている。その根はお互いに絡み合い、梢は絶対的な光（オール）と、闇（コーシエク）を目指して枝葉を茂らせている。

さて、光と闇はお互いに補う機能を持っている。無限の密度をもつ光が、AIN SVP AVR（アイン ソフ オール）だとすると、その対立者として無限の闇、AIN SVP Ch VShK（アイン ソフ コーシエク）が存在する。それは対立の構図ではなく、光の裏返しとしての闇を意味する。従って、最も粗雑な世界であるアッシャーを境として、我々の下位の世界に「殻の王国」がある。

《黄金の夜明け》団では、7宮殿の象徴図をマルクトの下の7地獄と対応させていたが、さらに精密に考えると、闇の四界が存在する。所謂、逆世界（HPK OVL M ハーパク オーラム）である。それを表すのが次図である。



それでは、どの程度までの《存在》を呼び出すことができるのか。多重世界において界層を越える技術（「界越え」）は、1段階までは自由に、2段階は制限を受ける。3段階は事実上不可能な努力を要するという暗黙のルールがある。

我々より上位の存在を呼ぼうとすると、物質世界（O）の我々は、精神を高次に同調することにより、天使の領域である形成世界（I）はおろか、大天使、玉座の領域である創造世界（B）までは容易に接触できる。しかし、純粋な光の領域、流出世界（A）には、なかなか到達できない。

一方、我々より下位の存在を呼ぶときは、物質世界（O）から逆物質世界（HO）の住人である妖魔（MPL TzTh、ミプラッツ）を喚起すると1段階の界越えとなる。特に問題ない。妖魔とは元素界の住人の墮落した親戚である。さらに、逆形成世界（HI）の悪魔（RVCh RO

H、ルアク・ラー)を喚起すると、2段階の界越えとなり、部分的な顕現しか達成できない。そのため悪魔は不完全な姿を纏って現れることになる。さらに飛躍して逆創造世界(HB)の11人の魔王(MLKIM ROH、メレキム・ラー)を喚起するのは凄まじい大事業になる。

しかし、これには《八頭の赤竜》及び《八頭の青竜》という抜け道が存在する。

その神話的枠組みについては、『黄金の夜明け魔術全書』の「エデンの園の図」の説明を見て頂きたい。巨大なこの宇宙図の中に、総ての存在は整然と収まっている。我々は通常、神や天使たちに思いを馳せているが、大宇宙の下半分たる「破」の世界を忘れてはいけない。大宇宙に呼応する小宇宙の人間にも、当然、このありがたくない下半分は存在する。それは人間の無意識の中に隠れた古い行動様式である。サタニストたちは、下半分に焦点を当ててその不安定な感情を増幅する。また、一部の信仰家は、上半分だけを取り入れようとする。そのどちらも誤りである。人間の昼の部分を支配する天使も、夜の部分を支配する魔天使も、等しく彼の魂の一部なのである。その両者を釣り合わせ、豊かな人間性を養うことこそ真の「均衡」の道である。

## 5 召喚と喚起の差異

靈的存在を呼び出す技法における《召喚》と《喚起》の違いを明確にしなければならない。この魔術用語は非常に曖昧な使われ方をしてきたが、今日では、ここに書き記すような概念が定着してきたと思う。

我々の用いる召喚 (Invocation/Injuration) と喚起 (Evocation/Conjuration) は、方向性の異なる二つの魔術技法である。どちらの技も、人間以外の靈を呼び起こすものに違いないが、術者の精神及び倫理的立場は180度入れ替わる。すなわち、

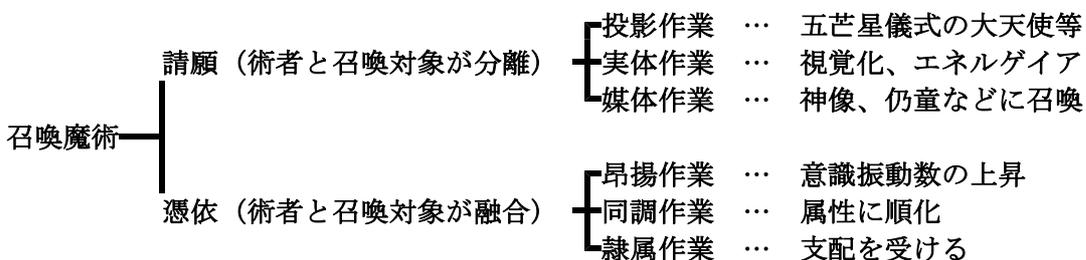
召喚 (Invocation)	天使または大天使を地上に、	懇願し、	来臨を仰ぐ。
喚起 (Evocation)	四大の精霊、妖魔等を眼前に、	命令し、	呼び付ける。

人間を基準とすれば大天使、天使などは進化の上級者である。かれらを呼び付ける能力は人間にはない。中世の天使魔術などで、天使に命令しているように見えるのは、さらに上級者である「神の名前」を使っているからだ。不法な命令などすれば直ぐにツケが来る。一方、四大の靈、妖魔などは人間からすると進化樹の下位に属する存在である。『黄金の夜明け魔術全書』では、「一般指導及び魂の浄化に関して」という文書に、「人間は命令者として、かれらをいたわる必要がある。むろん、野獣が人間を襲うように、能力のない人間が命令を発すると反撃を食う危険はある。」と注意している。

### (1) 召喚魔術

さらに詳しく召喚魔術を検討してみよう。召喚とは、訓練された魔術師が「神」とか「天使」という靈的存在を自分または特定の領域に引き降ろし、受け入れる技術である。召喚の対象は、主としてブリアー界やイエツィラー界の存在であり、特定の神名を唱えるとき以外はアツィルト界に干渉することはない。一般に、エジプトの人格神はカバラの体系では、大天使や天使と同格である。アヌビス神やイシス神などの大物の神は、大天使格であり、ミン神やヘペリ(甲虫)神などは天使格だ。しかし、エジプト神は時代と地方によって崇拝の度合いが違うので、神格が変動する。しかも、一人の神の内部でもブリアー界で主に活動する部分と、イエツィラー界で主に活動する部分があり、容易に固定できない。従って、古くて癖のある神を召喚するときは、神話や由来を良く調べ、性質を細かく分析しておかないと靈的な座標を設定できなくなる。

一般に召喚には、次の2種類の方法がある。



請願召喚は術者にかなりの自由度がある。同時に、高次の存在との対話には少し難がある。言葉や、身振り、色彩イメージなどで対話せざるを得ないので、困難な上に誤解が生じる恐れがある。

一方、憑依召喚は「盃の技」と呼ばれる技法で、魔術師が自己の「自由」(「意志」ではない)を部分的に放棄し、自らの肉体を神の靈を受け止める盃にする技である。この場合、召喚

を成功させた魔術師は、神とともにいるのではなく、実効的な神そのものである。その結果として、盃である術者に精神的、情緒的、そして稀に肉体的変容が生じる。神の意識をいくばくか保持して、理性的に話すことのできる術者もいるが、通常は補助者が対話を記録する。意志疎通は、術者の脳を使うので正確である。一般にこの方法は、素性の正しい神や大天使などの召喚に用いる。天使や知霊などは、請願召喚で行うのが普通である。理由は自分を解放する相手が危ない存在であってはならないからだ。



低次の神、エジプトで言う小さなネテルを召喚するときは、十分に注意が必要だ。肉体を「乗り回す」ことを喜ぶ霊もいるからだ。支配権を譲るのは危険である。また、自分は確実な手順を踏んだと思っても、神存在の影響が精神の深い部分に残存すると、作業の終了後に、ジキルとハイド式の不快な多重人格を発動する危険さえある。作業終了後の追儼が不完全だということになる。

また、大天使と言えども無分別な召喚をしてはいけない。大天使ミカエルの光の要素、大天使サマエルの闇の要素に焦点を結んで召喚すると、憑依召喚は危ない。

集団作業の場合は、信頼できる仍童を選び、彼／彼女に召喚する。ただし、セト神をフルサイズで召喚しようというときは、仍童には相当の容量が必要だ。霊的感受性だけでなく、器の大きさを確認しておかないと発狂したり、悪い場合は生命にも影響する。出現する神に悪意はなくとも、弱電回路に落雷するような衝撃を与えることがある。

むろん、殆どの召喚魔術は術者の実力が伴わず、そんな雰囲気とする程度である。しかし、基本的にはダイナマイトがどこまで燃え、どこから爆発するかという実験をしているのだと認識していただきたい。召喚魔術が喚起魔術よりも安全だと思いつむのは、致命的な誤りである。

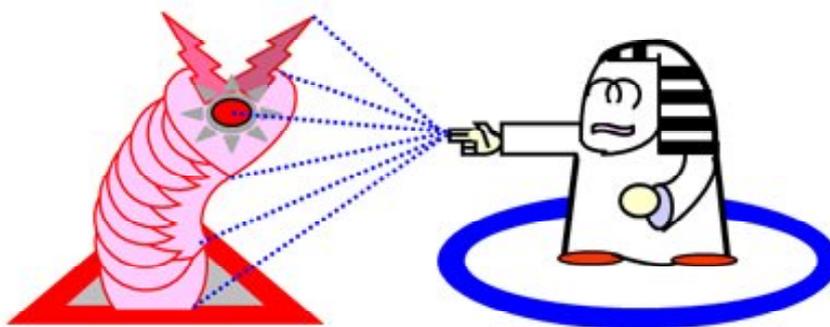
正しい方法は、召喚する神の位相を定めることだ。儀式の目的に整合した神の部分の召喚する。これが大切であろう。そして、特別な目的と周到な準備なくして、非人格神であるカバラの神（神名によって表示される膨大な絶対者の位相）や、源初の混沌神、宇宙原理であるタオやブラフマーなどを召喚してはいけない。

## (2) 喚起魔術

一般的なイメージでは、魔法円のなかで煙を吹き上げながら出現する悪魔を呼び出す魔術師というのがステレオタイプの魔術そのものである。この種の技法を喚起魔術と言う。すなわち霊的存在を上位の霊的存在の助力を得て呼び出すことを喚起と言う。その場合、自分より格が上の霊に命令することはできないので、魔術師はしばしば神の威光を纏う。喚起の作業に先立って、系列の神を召喚するのは、そのためだ。従って理屈の上では神々さえも、上位神の同意が得られれば喚起できる。

しかし、一般的には進化樹の上で人間と同格かそれ以下の存在を喚起するのが普通である。また、進化の傾向の違うクリポトの魔的存在を喚起する場合は、かれらの位格に応じた防御手段を講じないと極めて危険である。

その危険を少しでも減ずるため、喚起魔術では防御の魔法円が描かれる。そして、喚起対象となる霊的存在は、三角形のなかに呼び出される。従って、喚起を「三角形の技」と呼ぶこともある。



この三角形のなかには顕現化のための媒体、呼び出される霊的存在を象徴するものが置かれている。三角形は霊の顕現の焦点となる場であり、霊はその頂点を通して三角形のなかに現れる。しかし、霊をその内部に拘束する効果は持たない。凶暴な霊を召喚した場合は、魔術師を防御するのは魔法円と魔法円を強化する光のみである。喚起された霊は、通常、視覚的映像のみか、影絵、煙や蒸気のような曖昧な形象で出現する。物質化することは極めて稀である。古い伝承では物質化のためには、エーテル的素材を提供する「血液」が必要だとされている。しかし、これは現代の魔術にはそぐわないものだ。霊的存在の顕現は、ひとえに術者の意志と創造的想像力が生み出すものである。それは世界がマーヤーに過ぎないように、限定された領域にのみ存在する仮想の現実なのである。完璧な物質化は、魔術師の能力と存在の場と時間の適合にのみ依存する。生命の犠牲は、魔術師の確信を補助する手段に過ぎない。

アレスター・クロウリーの定型化された喚起魔術によると、最初に魔術師は作業領域またはセフィラを支配する神に呼びかけ、その權威のもとで大天使に、所要の天使を作業の助力のため派遣するよう求める。天使に設問するため知霊を差し向けるよう要求する。召喚した知霊には權威をもち、所望の霊を顕現させるよう命令する。

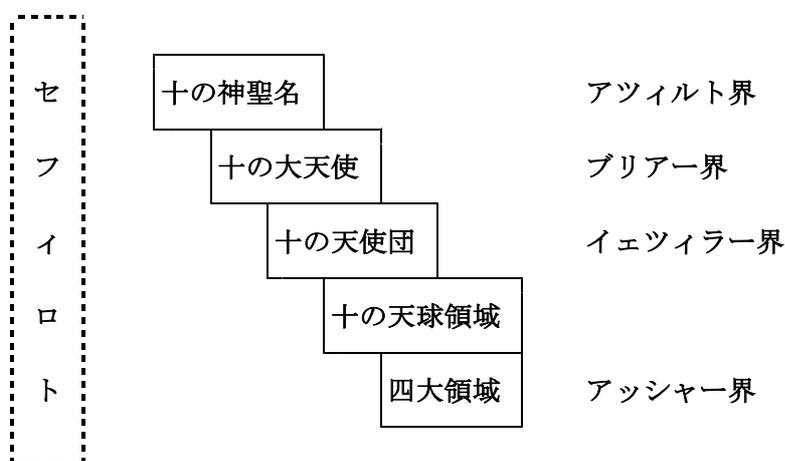
この手順で、四大、惑星、獣帯、エノキアン・タブレット、その他の系列を持つ霊的存在を喚起できる。

# 実践講座

## 6 天使存在

反逆天使の神話には、さまざまなヴァリエーションがあり、神はその寛大さを発揮して、相当数の天使を許したというものがある。許された天使は、四大のなかに散り、それを領する天使となる。この考えを背景に、善と悪の天使はその住居によって6階級に分かれるという説もある。すなわち、第1階級は反逆しなかった天使で、天空に住む。第2階級は、地上の上空の空気の層に住む。第3階級は地上に。第4階級は水中に。第5階級は、深い穴や洞窟の奥に。第6階級は、地底及び地獄に住むと言う。

しかし、これらは天使と元素霊を混同した見方であり、納得のいくものではない。非物質存在としての天使の分類は、アニマ・ムンディの十層を利用したものが、我々魔術師には最も身近である。すなわち、セフィロト体系による十の領域に存在する天使である。その神的影響力の連鎖は、次のようになる。



- ◎ ケテル  
神聖名 AH I H エヘイエー  
大天使 MT TR VN メタトロン  
天使団 Ch I V Th HQ D Sh カイオス・ハ・カデシュ  
天 球 RA Sh I Th HGL GL IM ラシス・ハ・ギルガリム

最初の流出点であるケテルに帰属する神聖名は、エヘイエーである。

大天使は、メタトロン、「貌の王子」である。語源は不明であり、ミトラトンと記載している文献もある。かれは主の言葉をモーセにもたらした「羽根の王」でもある。

天使団は、カイオス・ハ・カデシュ、すなわち「聖なる生ける創造物」である。作用の天球は、ラシス・ハ・ギルガリム、「最初の渦」、「原初動」という意味であり、万物に生命の恩寵を与え、宇宙を満たす運動である。

- ◎ コクマー  
神聖名 I H ヤー  
大天使 RZ I A L ラツィエル  
天使団 AV P N I M オファニム  
天 球 MZ LV Th マツロス

コクマーの神聖名は、ヤー、「神聖なる理想的叡知」である。

大天使は、ラツィエル、「秘められた知識の王子」である。

天使団はオフアニム、「輪」ないし「渦巻く諸力」である。  
作用の天球は、マツロス、すなわち「恒星天」にある。ここにおいて事物の形が処理される。

◎ ビナー

神聖名 IHVH ALHIM ヤーウェ・エロヒム  
大天使 TzPQ IAL ツァフキエル  
天使団 ARALIM アラリム  
天 球 ShBThAI シャバタイ

ビナーの神聖名ヤーウェ・エロヒムは、「創造」と「来るべき世界の生命」の完成である。  
大天使は、ツァフキエル、「邪悪に対する霊的闘争の王子」である。  
天使団は、アラリム、「大いなる強き者」の意である。天使ジョフィエルもまたビナーに帰する。  
作用の天球は、シャバタイすなわち「安息」であり、混沌物質に形と相似を与える。また、「土星」の活動の天球を支配する。

◎ ケセド

神聖名 AL エル  
大天使 TzDQ IAL ツァドキエル  
天使団 ChShMLIM カシュマリム  
天 球 TzDQ ツェデク

ケセドの神聖名エルは、大いなる強大な「神」の称号であり、栄光、荘厳及び恩寵をもって支配する。  
大天使は、ツァドキエル、「慈悲と善の王子」である。  
天使団は、ハシュマリム、「輝ける者たち」である。  
ケセドは別名をゲドゥラーという。「荘厳」と「栄光」の意である。  
作用の天球は、ツェデクすなわち「正義」と呼ばれ、物質の姿を形成し、平和と慈悲を与える。また、「木星」の活動の天球を支配する。

◎ ゲブラー

神聖名 ALHIM GBVR エロヒム・ギボール  
大天使 KMAL カマエル  
天使団 ShRPIM セラピム  
天 球 MDIM マディム

ゲブラーの神聖名エロヒム・ギボールは、大いなる恐るべき神であり、悪を裁き、罰し、怒りと恐怖と嵐をもって支配する。その歩みは電光と炎である。  
大天使は、カマエル、「剛毅と勇気の王子」である。  
天使団は、セラフィム、すなわち「燃える者」である。  
ゲブラーの別名は、ディン、「審判」または、パカド、「恐怖」である。  
作用の天球は、マディム、すなわち「奔流する力」と呼ばれる。力と戦と剛毅と虐殺をもたらす、いわば「復讐する神の燃える剣」である。また、「火星」の活動の天球を支配する。

◎ ティファレト

神聖名 IHVH ALVH VDOTh ヤーウェ・エロア・ヴァダース  
大天使 RPAL ラファエル  
天使団 MLKIM マラキム  
天 球 ShMSh シェメシュ

神聖名ヤーウェ・エロア・ヴァダースは、「叡知と知識の神」であり、「宇宙の光」を支配する。

大天使は、ラファエル、「輝きと美と生命の王子」である。

天使団は、マラクムあるいは、マレキム、天使王のなかの王である。天使ペニエルと天使ペリアルは、このセフィラに帰属し、特に金属界を支配する。

作用の天球は、シェメシュ、すなわち「陽光」の天球であり、金属物質に生命と光りと輝きを与える。また「太陽」の作用の天球を支配する。

◎ ネットアク

神聖名 IHVH TzBAVTh ヤーウェ・ツァバオス

大天使 HANIAL ハニエル

天使団 ALHIM エロヒム

天球 NVGH ノーガ

神聖名ヤーウェ・ツァバオスは、「万軍と凱旋と勝利の神」であり、正義と永遠のうちに宇宙を支配する。

大天使は、ハニエル、「愛と調和の王子」である。

天使団は、エロヒム、すなわち「神々」である。天使セルヴィエルが、このセフィラに帰属する。

作用の天球は、ノーガ、すなわち「外なる壮麗」の天球であり、熱意と愛と調和を生む。「金星」の活動の天球と植物世界の自然を支配する。

◎ ホド

神聖名 ALHIM TzBAVTh エロヒム・ツァバオス

大天使 MIKAL ミカエル

天使団 BNI ALHIM ベニ・エロヒム

天球 KVKB コカブ

ホドの神聖名エロヒム・ツァバオスは、「万軍と慈悲と同意と称賛と名誉の神」であり、叡知と調和のうちに宇宙を支配する。

大天使は、ミカエル、すなわち「壮麗と叡知の王子」である。

天使団は、ベニ・エロヒム、すなわち「神々の息子たち」である。

作用の天球は、コカブ、すなわち「星の光」であり、優雅と迅速と科学知識と技芸と能弁を与える。また「水星」の活動の天球を支配する。

◎ イェソド

神聖名 ShDI ALChI シャダイ・エルカイ

大天使 GBRIAL ガブリエル

天使団 KRBIM ケルビム

天球 LBNH レバナー

イェソドの神聖名シャダイは、「恩恵を賜る神」であり、偏在にして充足、神聖名エル・カイは、「生命の神」、「生ける者」である。

大天使は、ガブリエル、すなわち「変化と交替の王子」である。

天使団は、ケルビムである。

作用の天球は、レバナー、すなわち「月光」の天球であり、変化と創造物の増減を与える。「月」の活動の天球と人間の性質を支配する。

◎ マルクト

神聖名 ADNI HARTz アドナイ・ハアレツ

大天使 SNDLPVN サンドルフォン

天使団 ASHIM アシム

天球 OVLMI SVDVTh オーラム・イエソドス

マルクトの神聖名アドナイ・ハ・アレツは、「王国の天主」の意であり、「可視の宇宙」である「王国」と「帝国」を支配する。

大天使は、三柱あり、ケテルより反映される「貌の王子」メタトロン、「祈りの王子」サンドルフォン（女性形）、「地上のための和解者の魂」ネフェシュ・ハ・メシアである。通常はサンドルフォンが代表する。

天使団は、アシム、すなわち「火の炎」、これは「天使を燃える炎としての霊と家来にする神」と聖書にもある通りである。またこれらは別名「祝福された魂の階級」ないし「全き者となった義人の魂の階級」という。

作用の天球は、オラム・イエソドス、「元素の世界」である。コレム・イエソドス、すなわち「基盤を破碎する者」とも呼ばれる。マルクトは、「元素の天球」と呼ばれており、ここより万物が形成される「地球」を表象する。

ここでは、セフィロトに帰属する大天使及び天使団の名前を主体に記述した。よく誤解されるが、大天使は固有の名前であるが、天使団はグループの名称である。それは天使団の職能別の呼び名に過ぎない。従ってオフアニム天使団の天使が、すべてオフアニムという名前ではない。

また、天球に属する天使、知霊など、四大の支配者、天使等については別の機会に描写する。エノク魔術による大天使、天使などについても同様である。この外、『モーセ第6及び第7の書』などには、シム・ハメフォラシュ、すなわち神聖名に仕える72の天使があり、それぞれの召喚法なども伝承により残されている。同様に、『ソロモンの大鍵』など古い魔術書にも、さまざまな天使存在が記述されている。

## 7 召喚の技法

### (1) 一般的解説

《黄金の夜明け》団には、《生まれなき》者の儀式を予備召喚として用いる複雑だが、効果的な召喚の儀式があった。しかし、現時点でそれを模倣しても、微積分に挑戦する中学生の苦勞を味わうだけである。I ∴ O ∴ S ∴ のカリキュラムは、段階的に進むので、召喚に伴う危険を極力排除した簡単な技法を紹介しよう。

これから説明するのは、「天使魔術」と呼ばれる技法のひとつである。

天使魔術の様々な技法が中世の古文献などに残されている。それは、大天使や惑星の天使などを呼び出す技法である。その手順は、おおむね天使の固有の印章（シール）または印形（シギル）を用いて、天使を召喚し、特別な願い事をした後、天使の返事を確認して、出立を願うというものだ。しかし、これは完全な召喚を意図した場合のことであって、スクリーンを用いた疑似召喚の場合は、過程を簡略化することができる。

「疑似召喚」という用語を仮に用いたが、5項の表現を用いると「請願召喚の投影作業」にあたる。今回、対象とするのは、聖四文字の名前に帰属する靈的存在の一部である。

聖四文字	ヨド	ヘー	ヴァウ	ヘー（末尾）	技法
大天使	ミカエル	ガブリエル	ラファエル	ウリエル	 召 喚 ↓
天使	アラル	タリアハド	チャサン	フォーラック	
支配者	セラフ	タルシス	アリエル	ケルブ	
王	ジイン	ニクサ	パラルダ	ゴープ	
元素靈	サラマンダー	ウンディーネ	シルフ	グノーム	- - - - ↑ 喚 起 
元素	火	水	風	地	
閻公爵	サマエル	アザエル	アザゼル	マハザエル	
四方靈	アメモーン	ペイモン	オリエンズ	エギン	

上に並べた一連のグループの召喚と喚起の転換点は作業の性質によって若干変化する。閻公爵は閻を領する大天使の破壊的な影であり、天使の名前を纏っているが、クリポト的存在として扱うことも可能である。四方靈は、喚起の作業において強く元素靈等を引き出すときに補助として用いる方位風のダイモーンである。

一例として、元素靈の王たちを疑似召喚する技法を示す。王とは、マルクトの住人である元素靈たちのなかで、意識をティファレトの領域にまで引き上げることに成功した靈を指す。靈格そのものは人間より高い。それぞれの姿は、以下のとおりである。

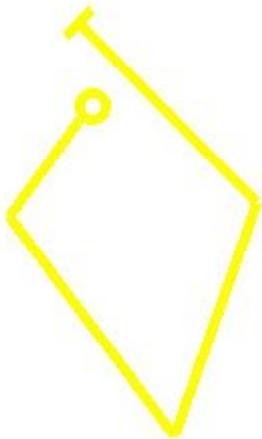
## (2) 風の王パラルダ (Elemental King of Air, Paralda)

人間に似た顔だちで、有翼の身体に薄衣を纏い空中を乱舞するシルフたちを支配する。かれは巨大な人間型の肉体に2枚の大きな翼をもつ。星飾りを散りばめた長い髪は風に煽られて上にたなびき、細く尖った顎、先端の伸びた耳、鋭い銀の目をもつエルフ的な双眸。プラチナを組んだ複雑な模様の首飾りを長い首に嵌め込んでおり、その下は足首まで覆う白銀の外套を纏い、2枚の翼の風切り羽根は膝のあたりまで、その身体を包み込んでいる。

パラルダの周りには強風が螺旋状の渦として存在し、空気の潮を四方に放射している。出現した王の前に立つものは清浄な風を真っ向から受け、心身ともに塵芥や、沈滞した気分、淀んだ感情などを吹き飛ばされてしまう。



風の王のシギル (黄)



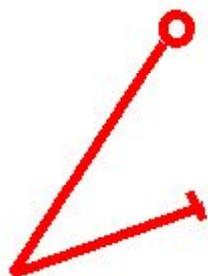
### (3) 火の王ジン (Elemental King of Fire, Djin)

火蜥蜴の姿で熔岩の上を徘徊するサラマンダー、炎を纏い鎚を携えた巨人の姿で現れるヴァルカン、血管に火が流れている美しいジャンたちの支配者。

かれは巨大な火の柱のごとく出現する。深紅の炎そのもので編まれたアラビア風の鎖鎧で首から膝まで覆われ、上着と腰帯に分離した金属の鱗板で組まれた鎧をその上から纏う。赤毛はまさしく炎そのもののように逆立ち吹き上げ、濃い髭をもつ。ときにターバンをして現れることもある。深紅の双眸は強い意志を放射している。精緻な装飾の入った半月刀を携えるか、凝縮した稲妻そのものを握っている場合がある。

ジンは、その周囲に様々な位相の熱を放射している。出現した王の前に立つものは、巨大な活力と盲目的な意志力そのものの圧力を受け、心身ともに熱を帯び、優柔不断な思考、疲労感などが払拭され、軽い高揚感を覚える。

火の王のシギル (赤)



#### (4) 水の王ニクサ (Elemental King of Water, Niksa)

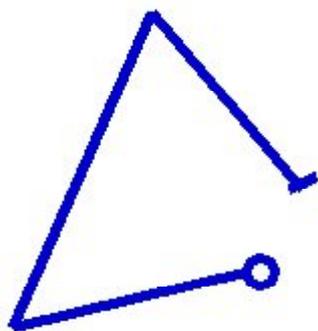
人間型の水妖ウンディーネ、半人半魚のマーメイドなど水を呼吸し、半透明な肌をもつ美しく危険な生き物たちを支配する。

緑色の肌に海草のような髪と薄い髭をもつ巨人。その濃青色の外套は鱗状の宝石で飾られ、外套の裾は白い泡で覆われている。海面下に沈んだ両足は、二股に分かれた鰭状の怪異な形状をもつ。

漆黒の瞳は深い淵を見通し、微笑むと真珠色の綺麗な歯並びが覗く。銚を携帯することもある。

ニクサは、その周囲に膨大な質量をもつ大海原の潮を従えており、そのせめぎ合う渦のなかに無数の泡が弾け、青黒い生き物が徘徊している。出現した王の前に立つものは、豊かな感情の海のなかに沈み込む。素肌の毛穴という毛穴から、清涼な水が染み込み、心身ともに浄化されていく。自己喪失感や、ささいな感情的葛藤など押し流されてしまい、浮遊感覚と豊かな情愛の心に満たされていく。

水の王のシギル (青)



## (5) 地の王ゴーブ (Elemental King of Earth, Ghob)

地中を自在に動くグノーム、コボルト等の小人たちの支配者である。

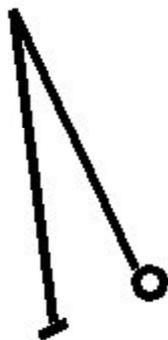
ゴーブは屈強な肉体に鞣した獣革を纏う巨大な男神として出現する。頑丈な胴体から伸びる頭部と四肢は、人間よりも比率が大きめの造形であり、力強さを感じさせる。

豪華な宝石を組み合わせて作った帽子を被り、岩を彫り込んだような無骨な表情に、千年もの齢を経た毛苔が髭のように覆っている。赤銅色に焼けた肌の下には、重労働で鍛えた筋肉の瘤が隆起し、かれが歩を進めるとともに、はちきれそうなほど盛り上がって動く。腕には重い鉄鎚または鋤をもち、革靴または皮のサンダルを履いている。

その黄金の瞳は憂いを帯びて深く、大地の力を周囲に放射している。ゆっくりと動くが何物も抗し難い巨大な圧力の体現者であり、出現した王の前に立つものは、全てを慈しむ大地の豊饒の力に満たされ、不動の信念と循環する生命のサイクルを確信する。



地の王のシギル (黒)



## 8 七の封印

### (1) 技法の魔術的背景

七の封印 (זַמְתוֹת הַשֶּׁבַע , Za'Hotamoth, Seven Seals) は、メルカバ・ヘハロート神秘主義において羊皮紙に刻印された封印、あるいは古代においては封印の指輪として用いられた。一方、「サル・トーラ法」では、テウルギア的神聖名を用いて身体の上に封印を置くことで、神聖の顕現から自らの霊体を保護するものである。

封印には、「大印章」(שְׁמַרְתוֹת הַשֶּׁבַע , Hotam Qadsh, Great Seals) を使用する。

ヘハロート文書では、神秘家は各宮殿の門番の天使長に、安全な通過を保障する神聖名の刻印された「印章」(שְׁמַרְתוֹת) または、「指輪」(זַמְתוֹת) を示す。<sup>(5)</sup> ここでは「印章」と和訳したが、「七つの封印」における「封印」(hotam) と同じ単語である。

古典古代においては、金属の護符、召喚壺などによく「印章」(σφραγίς) が刻印された。一般的には、金属、玉石、羊皮紙に刻印(彩色)されるが、この場合の素材は羊皮紙のような布きれ状の紙片に色つきインクで描かれたものである。色指定は、左右に対応している。

封印はメルカバ神秘主義において魔術的効力を発揮した。『大ヘハロート』によると、第6宮殿の門の監視者に対して、右翼の天使長カツピエルにザルリヤルの印章2個を示し、左翼の天使長ドゥミエルにはボロニヤの印章を示す等である。同書には印章の形状に関する記録はないので、一般的にユダヤ人のなかで使われた印章のデザインとして、「カイロ・ゲニザ草稿、JSTL ENA 1177. 16」を参照した。<sup>(6)</sup>

なお、同時期のグノーシス主義者の幾何学的印象の図例は、クルト・ルドルフを参照されたい。<sup>(7)</sup>

さて、第3章で述べたようにメルカバ (מַלְכָּא) とは、ヘブル語で「戦車」を意味する言葉である。メルカバ神秘主義における自己の封印 (שְׁמַרְתוֹת הַשֶּׁבַע) とは、神聖名を用いて防護や、パスワードの役割を期待するものである。<sup>(8)</sup> メルカバ神秘主義の実践者は、封印する箇所(神聖名を記した紙などを当てる)にもあった。

ここでは『マセー・メルカバ』の示唆する方法で、身体の個々の部分と全体を下方から順番に封印する。<sup>(9)</sup> この記述は、シェイファーの分類では、§566のマイクロフォルムに該当する。また、§562にも封印のやり方が解説されている。

ユダヤ教以外の神秘主義では、七天球に照応させる場合もあるが、七箇所の封印には、七惑星や、セフィロトとの特別の相関はない。

また、PCが封印を実践する際には、黄金の夜明け団の「神聖名発音振動様式」を準用する。<sup>(10)</sup> すなわち、ケテルから引き下ろした白輝光を封印する肉体の場所(第6の封印では太陽神経叢)において、その箇所に意識を集中させ、神聖名を振動させる。

大封印においては、長方形の聖名に囲い込まれた封印を使用し、小封印においては、円形の簡略化された封印を使用する。封印はあなたの前方から見たとき文字が読めるかたちに、当該、身体部位に視覚化する。

(5) 一例を示すと『小ヘハロート』では「指輪」が用いられ、『大ヘハロート』では「紋章」が用いられる。

(6) Peter Schafer und Shaul Shaked, *Magische Texte aus der Kairoer Geniza Band II*, Tubingen : J.C.B.Mohr, 1997, p.399.

(7) クルト・ルドルフ『グノーシス』岩波書店、2001年、188頁。

(8) Rebecca Macy Lesses, *Ritual Practices to Gain Power*, Harrisberg: Trintinty Press, 1998, p.82.

(9) Michael D.Swartz, *Mystical Player in Ancient Judaism*, Tubingen: J.C.B.Mohr, 1992, p.138f.

(10) リガルディー編『黄金の夜明け魔術全書』国書刊行会、1993年、270-271頁。

## (2) 七の大封印

「七の大封印を光体に刻印せん。」

「聖なるかな汝、ヨー (י'')。

智慧と洞察をもて、天と地を造りし者よ。汝が名は永遠なり。

カイ オープ シシ パーウ ラブ サム ビー キー タナイー

(ח' אורף ס'סי פ'יאו לו סס ב'י כ'י תנ'י)

そは汝が下僕の名前なり。」

聖なる名前を唱えつつ、剣指をつくり、揃えた両膝に当てる。

「アブリース ススティイー (י' ססתי' ס' אור'') わが脚を封じる。」

剣指を心臓にあてる。

「アバグ バググ (ג' אבג' ג'ג') わが心臓を封じる。」

剣指を右肩にあてる。

「アリム ティパー (פ' אר'') わが右腕を封じる。」

剣指を左肩にあてる。

「アブリース セシー イアー (י' אר'') わが左腕を封じる。」

剣指を喉にあてる。

「アビス セル バグ エル ヤーブ ドゥーエル

(ל' אר' י'ו ד'יו אל') わが首を封じる。」

両手を胸の前に組む。

「アブ パク キテル スス エイカド ヤドヤド ヤー

(או פ'אך ק'יטר סס א'חד י'ד'ד י'ה)

わが生命とすべての部分を守護するために。」

両手を頭上高く差し出しV字を形造る。

「オーブ パス ヤーウ キーブ ヨー ザハブ ヤーウ ティティス

(אורף פ'ת י'הו ח'יו י'ו ז'הו י'הו ת'תס)

わが天蓋を封じる。」

「リール ゴーグ (ג' ג'ר' ג'ル')

大いなるもの

ハープ ヤーブ ハープ (פ' אר'')

清浄なるもの

ハー イーウ ハーイ ハー ハー (י' י'ו י'ה' י'ה' י'ה')

久遠の詠唱よ。

智慧の主を讃えよ。すべての権能は汝にあり。

聖なるかな汝、ヨー (י'')

無敵にして、至高、至上、大いなる支配者よ。」



## 9 門の召喚

### ◎ 準備

特別な設備は必要ない。作業の本質は、霊の投影スクリーンたる門を視覚化し、その門越しに王と対話することである。法衣や、神殿設定は可能ならば行うと良い。より、臨場感を得ることができるだろう。

椅子を置いて、瞑想の準備を行う。(弛緩し、リズム呼吸を行う伝々)

### ◎ 小五芒星の追離儀式

### ◎ 調律

元素の方向を向いて座る。

出現を願う元素霊の王の名前をゆっくりと発音する。

最初は、息を吸いながら、音を出さずに発音する。名前の各音節ごとに、強い振動を与えながら、全身がその振動に浸されるようにイメージしなさい。

次に、息を吐きながら、今度は声を出して名前を振動させる。同じく音節ごとに区切りながら。

召喚すべき相手の名前を用いた調律は、両者の存在する領域に震動の橋を渡す。

風	東	パラルダ	パー・ラール・ダー	<b>Pahhh・Rahhll・Dahhh</b>
火	南	ジイン	ジィィィ・ンンン	<b>Jiiihhhh・Nnnnnn</b>
水	西	ニクサ	ニィィク・スー---	<b>Niiikk・Ssssss</b>
地	北	ゴープ	ゴォォォ・ブー---	<b>Goohhh・Bhhhhh</b>

### ◎ 門の視覚化

目を閉じて、右に略図で示した門を視覚化する。門を構成する屋根、柱、敷居は白い大理石で出来ている。細部まで詳細に、視覚化できるように努力せよ。

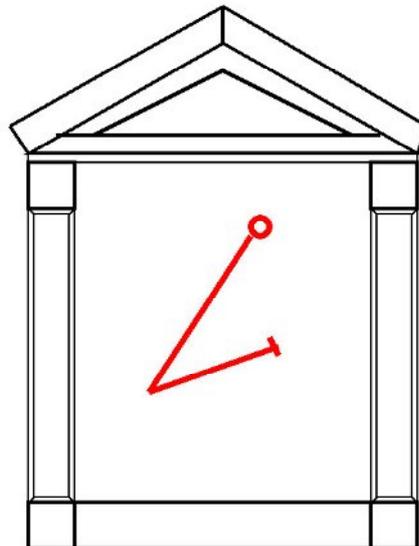
一度でできなくても、何度か試みるうちに次第に安定してくる。

門の色は王たちのシギルと一致させる。

右の図は、2本の柱で支えられた三角形の屋根を表現したものであり、最も簡易な形態の異世界への門を示したものである。屋根の中央に犠牲の小羊の血でタウ十字を描けば、「犠牲の家」の象徴図となる。

しかし、ここでは単純に門として扱うため余分な象徴を付与してはいけない。

門が十分に視覚化できたら、門の中心に王のシギルを描く。そのとき、ただ単にシギルが浮かびあがるようにイメージしても良いし、想像上の指や棒でシギルを描いても良い。



### ◎ 王の召喚

目を閉じたまま、門のシギルを消し、門の柱と屋根で区切られた長方形の空間に補色のスクリーンを作る。このとき扉が開くと想像してはいけない。門を出入する出入りに使うのはまだ先の話だ。この段階では、あくまでスクリーンの上に元素霊の王たちが影を落とすだけである。

正色の門と補色のスクリーンを視覚化したら、その補色の光を背景に王を視覚化する。  
最初は、影絵のように平板な姿で現れるだろう。

この召喚の回数を重ねるほど、出現した王の姿は、立体的になり、動き、言葉を発し、巨大な存在感を放射するようになるだろう。



◎ 質問または、浄化

あなたは、靈的に昇華された元素の精髓たる王に質問することができる。

むろん、元素の性質に応じた質問でなければならず、王の返事も言葉ではなく、仕草やイメージに過ぎないかもしれない。

質問がなければ、王のポジティブな力の波に全身を浸しなさい。ただし、純粋な力はあなたにとって善にも悪にも働くことを忘れてはいけない。例えば、ニクサの力場のなかでは、あなたの感情が豊かになるかもしれないが、必要な思考機能は抑圧される。それでは四人の王を均等な回数呼び出せば良いではないか、と考える輩もいるだろう。しかし、そのような発想自体が、あなたの健全な靈的発達を阻害しているのだ。魔術師は自らの意志で成長し、豊かな靈格を育くまねばならない。

◎ 出立許可

目的を達したら、王たちに礼を述べて、それぞれの領域に帰還していただく。

「偉大なる風の王パラルダよ、御身の助力に感謝する。  
迅き風のごとく去られよ、大天使ラファエルの名において」

「灼熱の火の王ジィンよ、御身の助力に感謝する。  
稲妻のごとく去られよ、大天使ミカエルの名において」

「茫洋たる水の王ニクサよ、御身の助力に感謝する。  
引き潮のごとく去られよ、大天使ガブリエルの名において」

「悠久なる地の王ゴープよ、御身の助力に感謝する。  
地鳴りのごとく去られよ、大天使アウリエルの名において」

◎ 門の消去

最初に、門のなかにある補色のスクリーンを元の色に戻す。  
次に門全体の色を灰色にくすませる。  
門の輪郭をぼやけさせ、灰色の霧のなかに形あるものを消し去る。

◎ 小五芒星の追儼儀式

目を開き、作業の場に存在する霊的影響すべてを払拭するつもりで小儀礼を行う。

◎ 記 録

魔法日記に儀式の内容を記録する。

注意：元素の王たちが、必ずしも人間に好意的であるとは限らない。

かれらは人類とは別系統の進化樹に属する。従って、神話的枠組みを嵌めた上でなければ、本来は対話そのものが成立しない存在である。

かれらと対面するときは、大天使などとは違う用心が必要である。状況により、召喚ではなく喚起を用いるのは、かれらに命令しなければならない場合があるからだ。しかし、かれらは天使格の霊的存在なので、理不尽な欲望に根差した要求をしても撥ね退けられる。また、その性質にそぐわない要求をしても従わない。例えば、ニクサに砂漠の道案内をさせるとか。

門の召喚は、必ず1回につき王ひとりだけに留めること。一度に四人の王を召喚すれば、あなたの内部に混乱が生じるだけである。また、最初は毎日行うのも良いが、手順に習熟したら週に1度かそこらで良い。この技法は、いずれさらに高度な技法に統合されていく過度的な手順に過ぎない。

召喚魔術そのものは非常に魅力的である。学習途上の諸君が、大天使や天使を召喚する技法を行いたくなるのも無理はない。

しかし、ここでは敢えてそれを禁じておこう。正式に団に参入し、団の集合霊の保護を受ける状態で行うのは危険ではないが、まだ見習いを初めたばかりで、召喚魔術に手を出すのは、明らかに無謀である。

## 第9ヶ月目の瞑想

### 瞑想課題：火文字の瞑想

今月の瞑想は、ヘブル語の文字を活性化して用いる。

手順そのものは簡単であり、目を閉じ、リラックスしてヘブル語の文字を映像として思い浮かべるだけで良い。これを試みるとき、マントラ瞑想を併用するとより効果的な場合がある。

もし、何もないところで文字を思い浮かべるのが難しければ、1枚に1文字を描いた手持ちカードを用意して、それを15分ほど凝視してから目を閉じて瞑想に入ると良い。この瞑想は場所を選ばずに、いつでも行える。

『セフェル・イエツィラー』では、聖なる文字を「刻み込む」(ChQQ)という表現が用いられている。インクをつけて紙の上をなぞる「書く」という行為に対して「刻印する」ことは、表面からなにもものを奪い取ることにほかならない。従って、刻印された文字はその場に固定されて動かない。幻視の空間にどんなイメージが喚起されたとしても、刻印された文字だけはそのままである。「十戒」の石板に火の指が文字を刻んだ様子をイメージし、あなたの脳裏に文字を刻印しなさい。

しかし、肝心の文字だけはそのままで、これでは様々なイメージがそれを取り巻くのは避けられない。次の手順は、刻印された文字以外のイメージを意識的作業により全て消し去ることである。この手順を、『セフェル・イエツィラー』では、「抉る」(ChTzB)という言葉で表現している。

それは石を刻む手順に似ている。目当ての石を見つけたら、不要な部分を削り取ってしまうのだ。そして純粋な色と模様をもつ部分を残して磨きをかけることになる。

しかし、今月の課題瞑想は、上記の普通の文字を用いる技法とは若干違う。

瞑想には聖なる四文字の名前IHVHを用いるため、身と場を清めてから行うこと。トイレや風呂の中で時間潰しに行くなどは、もつてのほかである。

瞑想の準備として、入浴する。少量のあら塩を浴槽に振り撒けば、十分に儀式的入浴となりうる。部屋を片付けておき、可能ならば神殿を設定し、東面して座る。

◎ 第1週は、次のように瞑想する。

右図の文字カードを用意し、最初の15分間はそれを凝視し、次の15分間は目を閉じて、その文字を視覚化する。



◎ 第2週は、カードを用いずに視覚化を試みる。

もし、第2週に到っても視覚化が不安定ならば、カードを短時間用いても良い。しかし、その時間はできる限り短くなるように試みる。

この2週間で、文字の視覚化を安定させるように努力せよ。

◎ 第3週は、目を閉じた後に上空に無限に広がる青空をイメージする。

どこまでも透明な青空が広がったら、その青空に向かって飛翔していく自分を想像する。雲の層を7回突き抜けて、あなたは広大な雲海の上にいる。

ここで、見渡す限り白いスクリーンに覆われた世界をイメージせよ。無限の白を作り出したら、その上に黒い四文字を刻み込め。

◎ 第4週は、第3週と同じ手順を踏む。しかし、白い炎に覆われた世界をイメージし、その上に黒い炎の文字を刻み込め。

## 今月の読書

今月の学習の参考になる著作は、以下のとおりである。図書館で読むのも良いが、必読図書については購入することを勧める。

### 1 必読図書

今月の学習の参考となる著作は以下のとおりである。

M. ゴドウィン『天使の世界』青土社、1993年。

### 2 推薦図書

J. ラッセル『悪魔の系譜』青土社、1990年。

T. カイトリー『妖精の誕生』教養文庫、1989年。

Ronner, John. *Do You Have a Guardian Angel?* Murfreesboro : Mamre Press, 1985.

## 第9ヶ月目の課題

この課題は、今月の作業が終了した後に記入しなさい。記入した課題は魔法日記のコピーと一緒に提出すること。

- 1 あなたが魔術を学ぶ理由は何か。テキストとは別の言葉で語りなさい。
- 2 魔術師に要求される徳目は、眼識／ユーモア／献身のほかに何かがあると思うか。
- 3 霊的知覚に属すると思う体験はあるか。あればそのときの様子を詳しく書きなさい。
- 4 霊的存在のヒエラルキアは、意図的に上下の方向性をもつ直線的構図で描いてある。あなたの思うところの平面的マンダラを描いてみなさい。
- 5 あなたの言葉で、召喚と喚起を定義してみなさい。
- 6 あなたが疑似召喚した四人の王たちの特徴をそれぞれ描きなさい。文章でも絵でも良い。